

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：84704

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00845

研究課題名（和文）鎌倉末～室町期における臨済宗法燈派の動向に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on the activities of the Zen monk disciples of Hotto-kokushi from the late Kamakura period to the Muromachi period

研究代表者

坂本 亮太（Sakamoto, Ryota）

和歌山県立博物館・学芸課・学芸課長

研究者番号：40435904

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：無本覚心を祖とする臨済宗法燈派は鎌倉末～南北朝時代にかけて、律宗などとならび公武の篤い帰依を受け、早くより地方展開をしていた。そしてその弟子たちもまた、当初は南朝、後には北朝とも密接に関わり、当該期の政治・宗教・文化に大きな影響を与えた。それにも関わらず、史料が少ないこともあり、十分な研究がなされていない現状にある。

本研究においては、本山である興国寺、紀伊半島を中心に、鎌倉時代末～室町時代にかけて大きな勢力を誇った臨済宗法燈派禅僧の事績と展開について、古文書のみでなく、頂相などの美術工芸品も含めて、関連する資料の収集をし、足跡の復元をするとともに、基礎資料の提示をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、これまで十分に位置付けられてこなかった臨済宗法燈派禅僧の活動について、紀伊半島を中心に、古文書・古記録をはじめ僧伝資料・語録・美術工芸品・近世文書・地誌など各種資料を集約・公開し、派祖である法燈国師（無本覚心）に留まらず、その弟子たちについても位置付けた点で学術的に大きな意義がある。また臨済宗法燈派禅僧の活動の一モデルとして慶雲至一の足跡について、各種資料を駆使して示すことができたことも成果である。あわせて博物館展示として一般市民に対して社会還元を図り、また現在は失われた「法燈派」の存在と活動について、寺院関係者に提示できた点も社会的な意義があったと言える。

研究成果の概要（英文）：The Rinzaï sect's Hottoha school, whose founder was Muhon Kakushin, received deep devotion from the courtiers, along with the Ritsu sect, from the end of Kamakura to the period of the Northern and Southern Courts, and began to expand into regional areas. His disciples were also closely involved with the Southern Court and later with the Northern Court, and had a great influence on the politics, religion, and culture of the period. Despite this, due to the scarcity of historical materials, sufficient research is currently not being conducted.

In this study, we will focus on the achievements and development of the Zen monks of the Rinzaï sect, Hottoha, which boasted great power during the period from the end of the Kamakura period to the Muromachi period, focusing on Kokokuji, the main temple, and the Kii Peninsula. We collected related materials, including art and crafts, reconstructed the footprints, and presented basic materials.

研究分野：日本中世史

キーワード：臨済宗法燈派 興国寺 無本覚心（法燈国師） 慶雲至一（至一上人） 孤峰覚明 紀伊半島

## 1. 研究開始当初の背景

鎌倉時代末期に広範な社会事業を展開した勢力としては真言律宗が、また南北朝・室町期には北朝と密接な関わりをもち、外交や文芸などに大きな影響を与えた五山禅僧が取り上げられ、これまで多くの成果があげられている。鎌倉時代末期～室町時代における臨済宗法燈派禅僧は、律僧とならび公武の帰依を受け「禅律僧」とも呼称され活動し、大きな影響力をもった存在であるものの、その社会的な位置づけについては、歴史学においては原田正俊氏の研究がある程度である(『日本中世の禅宗と社会』吉川弘文館、1998年)。鎌倉時代末期～室町時代の政治・宗教・文化・地域社会を理解するうえで、臨済宗法燈派も律宗や五山禅僧と並び重要な存在であるにも関わらず、以下の二点を主な理由に、十分な研究が行われていない現状にある。

- ・南北朝時代には南朝方の帰依を受けたため南北朝合一後は外護を失ったこと。ただし北朝方に取り込まれた者たちもあり、その点については、研究史上あまり考慮されていないという研究史上の問題点もある。

- ・法燈派の本山であった興国寺(和歌山県日高郡由良町)は、豊臣秀吉による紀州攻め、興国寺や紀州の寺社においては天正の兵火で焼失し、近世には興国寺及びその末寺は妙心寺派となったこと。そのため、資料の集成も行われておらず、研究環境が整っていない。

このような史料制約・限界がある一方、法燈国師とその弟子たちは、鎌倉時代末期以降、南北朝～室町時代にかけて南朝・北朝両勢力と結びつき、当該期において非常に大きな足跡を残している。例えば、孤峰覚明は「南朝顧問」であり(「孤峰覚明行実」)、子晋明魏(花山院長親)は足利義満・義持に重用されるなど、政治的にも重要な役割を果たしてきた。さらに、臨済宗法燈派禅僧たちの活動は政治的な面にとどまらず、子晋明魏に特徴的なように、唱導文芸(法燈国師法語)・和歌(耕雲千首・新葉和歌集)・古典文学(源氏最要抄)・縁起(紀州鷲峰開山法燈円明国師之縁起・霊巖寺縁起)・寺社縁起絵巻(衣奈八幡宮縁起)などの制作等にも大きく関わっており、政治史・宗教史的な面のほか、国文学や美術史など文化史的な面からも臨済宗法燈派に関わる基礎的な研究が求められている現状にある。

臨済宗法燈派の個別寺僧の事績については、玉村竹二『五山禅僧伝記史料集成』(思文閣出版、2003年)もあるが、慶雲至一や伯巖殊楞のように立項されていない人物もいる。その点、僧伝についても資料収集と基礎的な事実関係の確定が必要な研究段階にあり、資料の集成が必要である。そのうえ、臨済宗法燈派については、これまで主に宗教(宗門)史の分野で研究が進められているが、地方展開をし、民衆に対して積極的な布教をした一派であるにも関わらず、地域社会(民衆)との関連についてはあまり論じられていない現状にある。その点、僧伝史料や語録等をも駆使しつつ、政治・文化のほか、地域社会(民衆)との関係を位置付けていく必要があるだろう。

史料制約を超えて、当該期の政治・宗教・文化等を明らかにするうえでも、臨済宗法燈派禅僧等の活動実態を把握する必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究においては、法燈国師(無本覚心)とその弟子たち、すなわち臨済宗法燈派禅僧の事績について、史料収集のうえ基礎的な検討を行うことを第一の目的としている。法燈派禅僧の活動(事実関係)を明確化することで、鎌倉時代末期～室町時代にかけての政治・宗教・文化・地域に与えた影響についてもあわせて検討していく。それは、これまで律宗や五山僧を中心に積み上げられてきた当該期の研究(細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館、1987年、玉村竹二『五山禅僧伝記史料集成』思文閣出版、2003年など)を相対化することにもつながるものと思われる。

また上記のような研究を進めていくうえでは、法燈派の本山であり、無本覚心を開山とする興国寺、およびその本拠となった紀伊半島における臨済宗法燈派の様相を明らかにする必要がある。そのため、まずは臨済宗法燈派の中心・拠点となった興国寺を明らかにすべく、その文化財の調査をおこない、紀伊半島における法燈派寺院の広がりについて追究していく。その際、同時代史料も限られることから、古文書・古記録以外の資料、すなわち美術工芸品、伝承や近世資料(近世文書や地誌など)も積極的に活用しつつ、残された文化財の把握もおこなうことで、総合的・複合的に法燈派禅僧を捉えることが求められる。そうすることで、後の時代・社会に与えた影響についても明らかになるものと考えられる。

さらに、法燈派禅僧の法脈と足跡を各種資料から明らかにしつつ、全国各地に展開した法燈派の様相を捉える。その際、全国各地の自治体史や郷土資料などを素材に、法燈派禅僧たちの足跡を踏まえて、法燈派の全国的な広がりについて検討する。

以上、法燈派禅僧の師弟関係、足跡をおさえつつ、紀伊半島を中心に法燈派禅僧が関与した寺社・地域に残る文化財を総合的な視点で位置付けることで、法燈派禅僧が与えた地域的な影響を明らかにしていく。そのうえで、法燈派の全国的な広がり、社会的な影響についても考えていきたい。

### 3. 研究の方法

研究方法として、以下の4点を意識して研究を進めた。

#### (1) 基礎的な資料の収集と提示

臨済宗法燈派については、上記したごとく、史料的な制約がある。そのためには関連資料を集約し、未刊資料については翻刻・公開により、資料情報の共有化が求められる。そこで、以下の二つの基礎資料について資料紹介を行う。

「紀州鷲峰開山法燈円明国師之縁起」「法燈行状」諸本の把握と収集と公開。

興国寺（和歌山県日高郡由良町）、円満寺（和歌山県有田市）、花園大学学術センター（京都市）などに関連諸本が所蔵される。これらの情報を収集・検討したうえで、和歌山県立博物館が所蔵する「紀州鷲峰開山法燈円明国師之縁起」の翻刻、史料紹介を行う。

「法燈国師法語」に関わる新出史料の翻刻と公開。

「法燈国師法語」は和歌山県立博物館・花園大学学術センター（京都市）・瀧仙寺（長野県小県軍青木村）などに所蔵される。それらを把握のうえ、和歌山県立博物館が所蔵する「鷲峰開山法燈円明国師法語」について、翻刻、史料紹介を行う。

#### (2) 同時代史料のみならず、各種資料を集約し、活動を位置付ける。

臨済宗法燈派については、上記したごとく、史料的な制約がある。しかしながら、頂相（絵画・彫刻）、美術工芸品（絵画など）、考古資料、近世文書、地誌、伝承など、様々なかたちでその痕跡を留めている。さらに、僧伝や語録、詩文など、これまで十分に活用されていない資料も存在する。それら各種資料を集約し、それらを用いて、総合的に法燈派禅僧の活動を位置付ける必要がある。本研究においても、古文書・古記録などにとどまらず、様々な資料を駆使して法燈派禅僧の事績を明らかにしていく。

#### (3) 法燈派禅僧の事績の検討。

臨済宗法燈派の個別寺僧の事績については、玉村竹二『五山禅僧伝記史料集成』（思文閣出版、2003年）もあるが、慶雲至一や伯巖殊楞のように立項されていない人物もいる。無本覚心・溪雲至一・高山慈照・孤峰覚明・子晋明魏（耕雲）・伯巖殊楞など、臨済宗法燈派僧の事績を僧伝や語録（刊本）と古文書・古記録・典籍類・頂相賛等をあわせて検討し、基礎的な足跡を明らかにする。法燈国師の弟子たちの存在を明らかにしつつ、その系譜関係を辿り、縁起・地誌・近世文書などの伝承も踏まえ、法燈派禅僧が残した地域的な影響を明らかにしていく。

#### (4) 臨済宗法燈派関係寺社の調査。

臨済宗法燈派禅僧ゆかりの寺社・故地に関わる踏査・資料（刊本以外の原文書や頂相等）調査を行う。具体的には、元亨寺（和歌山市）、紀三井寺（和歌山市）、誓度院（紀の川市）、金剛三昧院（和歌山県高野町）、円満寺（和歌山県有田市）、長楽寺（和歌山県有田川町）、能仁寺（和歌山県広川町）、興国寺（和歌山県由良町）、安養寺（長野県佐久市）などが挙げられる。

あわせて、法燈派関係寺社のうち、所在不明・廃寺となった寺社の関連資料の収集・探索を行う。方法としては、『紀伊続風土記』ならびに興国寺近世文書を素材に、紀伊半島における法燈派寺院の抽出作業を行い、関連寺社の調査をおこなう。

\* \* \* \*

以上により、臨済宗法燈派に関わる基礎的な史料の発掘・整理・検討をすすめ、資料の共有化を図る。またそのうえで、臨済宗法燈派という社会集団の特質、そして政治・宗教・文化・地域社会（民衆）との関わりを捉えることが可能になるものと考えられる。

### 4. 研究成果

#### (1) 論文等の成果

主要な論文・報告書として、以下のものをまとめた。

坂本亮太「至一上人考 南北朝期における臨済宗法燈派禅僧の一側面」『和歌山県立博物館研究紀要』28号、2022年）

至一（志一）上人は臨済宗法燈派禅僧としてはあまり著名な人物とはいえないが、僧伝・頂相・語録・古文書・石造物・文学史料など、各種資料を総合的に駆使し、その足跡と後に与えた影響などをあぶり出した。南北朝時代の政治・宗教と密接に関わった臨済宗法燈派禅僧の一つのモデルを提示することができ、本研究で意図している研究課題を實踐することができた一つの成果といえる。

坂本亮太「失われた廣八幡宮の縁起絵巻の原像を求めて 淡路の八幡宮縁起絵巻とサンフランシスコ・アジア美術館本から」(『和歌山県立博物館研究紀要』29号、2023年)

臨済宗法燈派と八幡信仰とは密接な関係にある。紀伊と淡路に残る八幡宮縁起絵巻の史料紹介をおこなうとともに、テキスト・画像の分析をおこなうことで、八幡宮縁起絵巻の系統・継承関係の検討をおこなった。あわせて、サンフランシスコ・アジア美術館が所蔵する八幡宮縁起絵巻の独自異文の分析を通じて、廣八幡宮および臨済宗法燈派と関係する可能性を提示した。

坂本亮太『法燈国師』(和歌山県立博物館、2024年)

興国寺関連の文化財とともに、紀伊半島における法燈派寺院の広がりとその関連文化財を集約し紹介した。なかでも法燈国師および弟子たちの頂相と足跡を紹介することができた点が大きな成果である。あわせて、和歌山県立博物館が所蔵する「紀州鷲峰開山法燈円明国師之縁起」「法燈国師法語」の翻刻を掲載し、法燈国師に関する基礎資料の提示をおこなうことができた。

#### (2) 紀伊半島における法燈派の広がり

法燈国師(心地覚心)と法燈国師が開創した由良興国寺(由良町)に関する文書・記録・頂相(画像)・彫刻の調査を中心に実施し、法燈国師の足跡、興国寺の動向、興国寺の末寺とそれに関する資料の把握を行った。由良興国寺の中世文書は数が限られるものの、近世の末寺帳などから紀伊半島での広がりや影響力について把握することができる。そして、末寺帳・什物帳を手がかりに紀伊半島における法燈派寺院の調査・研究を進めた。

紀伊半島における法燈派関係寺院のうち、紀三井寺(和歌山市)・本恵寺(和歌山市)・円明寺(和歌山市)・神宮寺(紀の川市)・誓度院(紀の川市)・長楽寺(有田川町)・長谷寺(由良町)・松巖院(新宮市)・観福寺(白浜町)・大通寺(三重県紀宝町)に残る法燈国師像および法燈派禅僧関連資料(頂相・古文書など)の調査・撮影をおこなった。なかには学界未紹介の中世に遡る頂相も確認することができた。いずれも『法燈国師』(和歌山県立博物館、2024年)に掲載し、既知のものも含め、紀伊半島に残る法燈国師像の集成、法燈国師関連故地の一覧を作成した。

#### (3) 法燈派の全国的な広がり

臨済宗法燈派禅僧の地域的展開を把握するため、全国の法燈派関連地域のうち、豊後(大分県)・土佐(高知県)・伊予(愛媛県)・美濃(岐阜県)・信濃(長野県)・越中(富山県)に関する自治体史、郷土資料等の調査・確認をし、一部現地踏査を実施した。特に長野県小県郡青木村灌仙寺、富山県高岡市国泰寺などでは、現地踏査のほか什物類や法要の調査を行った。臨済宗法燈派が、いつ、どのような人物によって、また何を契機に広がっていったのかなどの情報がある程度は押さえることができ、法燈派の地域展開に関わる基礎資料の収集を行うことができた。今後も各地の関連故地における郷土資料等の調査をし、一覧化していく必要性を痛感したが、その点は今後の課題として残った。

あわせて、法燈派とも関連の深かった臨済宗東福寺聖一派のうち別峯大殊に関わる資料調査も行った。既に論文化はしていたが、大阪府交野市光通寺が所蔵する頂相や古文書などについて改めて調査を行い、聖一派と法燈派との関連についての検討も進めることができた。曹洞宗との関係については論文・資料の収集のみで、分析等までには至らなかった。

いずれも同時代の古文書や古記録のみではなく、近世文書・頂相(絵画・彫刻)・絵巻・祭礼・伝承などを含め、様々な文化財を集約し、複合的な視点で捉えるといった手法で研究を進めた。文献史料は限られるものの、意外と様々な文化財が残されていることが明らかになった点、そして文化や信仰など後世への広がりも明らかになった点が重要と思われる。しかしながら、同時代の禅僧の語録、詩文などについては、一部の史料収集に留まり、さらなる追跡・追究が必要かと思われ、その点に課題を残した。

#### (4) 研究成果の社会還元

和歌山県立博物館(和歌山市吹上 1-4-14)において、企画展「法燈国師 きのくに禅僧ものがたり」(令和5年(2023)9月2日(土)~10月1日(日)、開催日数26日)を開催し、研究成果を展示というかたちで示した(来館者数2,477人)。古文書・彫刻・絵画・考古資料などを展示し、紀伊半島における法燈国師の足跡、法燈国師の弟子たちの活動について紹介し、研究者のみならず、県民・市民といった一般のかたまでも含めて、成果還元をおこなった。基礎資料の提示を行うことができた点が何よりの成果だろう。また、これまで法燈国師や法燈派、興国寺に関する展示会はほとんどおこなわれておらず、法燈派ゆかりの寺院との新たなつながりを得ることができたことなども大きな成果といえ、問い合わせなども多く大きな反響があった。また、あわせて図録兼報告書『法燈国師』(和歌山県立博物館、2023年9月)を作成した(これらは全国の大学や博物館、公共図書館などへ寄贈した)。調査成果の詳細については、図録兼報告書を参照されたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 坂本亮太	4. 巻 84
2. 論文標題 戦国・織豊期における熊野の武士に関する新史料 新出色川文書の紹介 附 堀内氏善書状	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 和歌山地方史研究	6. 最初と最後の頁 25-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本亮太	4. 巻 29
2. 論文標題 失われた廣八幡宮の縁起絵巻の原像を求めて 淡路の八幡宮縁起絵巻とサンフランシスコ・アジア美術館本から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 和歌山県立博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 21-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本亮太	4. 巻 28号
2. 論文標題 至一上人考 南北朝期における臨済宗法灯派禅僧の一側面	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 和歌山県立博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 11-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本亮太	4. 巻 130-5
2. 論文標題 ―― 宗教（総論・中世前期）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 99-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 坂本亮太
2. 発表標題 紀の川下流域における荘園の成立と展開 水をめぐる問題から
3. 学会等名 シンポジウム「古代・中世における和歌山平野の開発」（和歌山県立紀伊風土記の丘）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坂本亮太
2. 発表標題 中世 躍動する地域勢力
3. 学会等名 和歌山地方史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坂本亮太
2. 発表標題 聖教・典籍が開く地域史 紀州中世史の場合
3. 学会等名 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会 近畿部会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 坂本亮太	4. 発行年 2023年
2. 出版社 女人高野日本遺産協議会	5. 総ページ数 187
3. 書名 『日本遺産「女人高野」調査研究報告書』（担当：「中世高野山麓における「女人高野」の広がり」と伝承天野と慈尊院）	

1. 著者名 坂本亮太	4. 発行年 2022年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 藤田達生編『歴史遺産が地方を拓く 紀伊半島の文化財』（担当：「中世後期那智山膝下の地域構造」）	

1. 著者名 坂本亮太	4. 発行年 2022年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 藤田達生編『歴史遺産が地方を拓く 紀伊半島の文化財』（担当：南北朝時代の熊野古道 国阿上人絵伝を読む）	

1. 著者名 坂本亮太	4. 発行年 2022年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 藤田達生編『歴史遺産が地方を拓く—紀伊半島の文化財—』（担当：熊野の中世村落を探る）	

1. 著者名 伊藤裕偉・北野隆亮・坂本亮太	4. 発行年 2022年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 183
3. 書名 藤田達生編『歴史遺産が地方を拓く 紀伊半島の創生』（担当：「熊野（牟婁郡域中心）関係文献一覧」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------